

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.4 平成29年11月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151~1154
Fax 087-832-1155
<http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 就任にあたってのご挨拶（新センター長）…………… 1
2. 退任のご挨拶（前センター長）…………… 2
3. 平成29年度新任教員研修会報告…………… 3
4. 第65回中国・四国地区大学教育研究会報告…………… 4
5. よりよい授業のためのFDワークショップ報告…………… 11
6. FDスキルアップ講座報告…………… 13
7. 注目の全学共通科目のご紹介…………… 18
8. 新スタッフからの一言…………… 19

1. 就任にあたってのご挨拶(新センター長)

大学教育基盤センター長 高橋尚志



この10月1日より、藤井宏史前センター長の後を継いで、センター長に就任いたしました高橋尚志と申します。9月までは藤井センター長の下で副センター長を務めておりましたので、そう目新しさも無いのかも知れませんが、改めて新任のご挨拶を申し上げます。

さて、本センターでは、この間全学共通教育カリキュラムの検証を行い、カリキュラム改革を行ってきており、今その一連の改革の仕上げの段階にきています。少し振り返りますと、改革の出発点は本学の共通教育スタンダードであり、そのスタンダードに照らして現状を分析し問題点を洗い出し、必要な改革を行ってきました。その中には、全学共通教育を中心的に担う組織の強化も含まれ、3つの部を持っていた旧大学教育開発センターに、新たに3つの部を加える形で現行の大学教育基盤センターに拡充しました。スタンダードとの関係では、本学の教育の柱である主題科目群に、本学の目指す「地域に根ざした学生中心の大学」を実現するため、地域に関する主題C「地域理解」を立ち上げました。そのうち、地域と香川大学を学ぶe-Learning科目「主題C-基礎科目」を1単位必修として本年度より提供を開始しました。また、柔軟な学事暦を全学的に導入する一環として、他学部在先駆けて全学共通教育では、主題科目の一部にクォーター制を本年度より導入しました。他にも、改革の第一段階と位置付けて、幅広い学びを学生に保証するために履修方法の改善を行い、また、新たな学びの場として学問基礎科目の中に「書物との出会い」や「自然科学基礎実験」を含む「学問の扉」科目を新設しました。

これら改革を加えてきた諸課題については、その基本に上述の共通教育スタンダードを置き、その実現を目指す方向で中期目標・計画にも加えつつ改革・改善を行ってきました。一つ一つの課題を考えれば、それは学部教育等への影響が大変大きく、全学的に議論をしながら、調整も諮りつつ進めなければならないものばかりでした。時に熱くもなるこういう議論に、学部や科目領域から共通教育コーディネーターとして出て頂いた先生方をはじめ、学部の教務委員長などの先生方を通じて実に多くの先生方、それに実務を担当される事務職員の方々にご参加頂きました。文字通り実に多く対話させていただき、新たなアイデアを頂戴したり稚拙な部分をブラッシュアップしたりと進めて参りました。皆さま方には大変感謝しております。

全学共通教育は、全学の協力無くして何かを成し遂げることはできません。これまでは副センター長と共通教育部長という立場で関わらせて頂きましたが、センター長となりましたら、私のスタンスと大学教育基盤センターの基本的な考え方は変わりません。改革の第二段階と位置付けている今後取り組むべきいくつかの課題についても、皆さま方の声に真摯に耳を傾けながら進めて参る所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 退任のご挨拶(前センター長)

藤 井 宏 史



平成 25 年 10 月から 4 年間、教育担当理事としてセンター長を務めさせていただきました。教職員の皆様方には、センターの運営と全学共通教育のさまざまな取組にご支援ご協力いただき誠にありがとうございました。

この間、センター長として主に取り組んだのは、大学教育開発センターの改組とカリキュラムの見直し、即ち「全学共通教育の改革」です。平成 26 年 4 月に設置した教育戦略室のもとで、前任の有馬理事が大平理事と検討されてきた教育・学生支援関係のセンター改組案を参考に大学教育開発センター改組案をとりまとめ、平成 27 年 4 月にセンターを改組し、この間、全学共通教育のカリキュラム改革に取り組んできました。

これら改革を進めるうえで重要な役割を果たしてきたのが教育戦略室です。教育戦略室は、学士課程教育と大学院教育の改革を進める教学組織のコントロールタワーとして設置したもので、センター調査研究部と役割分担をしながら改革案の検討を進めてきました。

全学共通教育の改革を検討するにあたって重視した点は 2 つあります。1 つは、全学共通教育が学士課程教育の基盤であり重要であることを打ち出したことです。ご承知のように本学の学士課程教育は、香川大学共通教育スタンダードをベースにしながら、それと整合する形でディプロマポリシーが策定されており、全学共通教育の重要性が明示されているのが特色の一つです。2 つ目は、その重要性を高めるために、共通教育スタンダードを徹底し、近年の学士課程教育に求められる新しい教育ニーズ（ICT やフィールドワークを活用したアクティブラーニングなど）に対応して充実を図ることです。

そこで大学教育開発センターの改組では、センターが担う全学共通教育の運営機能と大学教育の開発機能のいずれもが学士課程教育の基盤であると考えて、「大学教育基盤センター」に名称変更するとともに、新しい教育ニーズに対応すべく、組織のウィングを広げ再編・強化を図りました。またカリキュラム改革では、共通教育スタンダードを徹底すべく「幅広い学び」の仕組みを導入し、新しい教育ニーズに対応すべく、「主体的な学び」、「地域からの学び」の機会を増やし、それらを保証する「柔軟な学びの仕組み」として一部科目にクォーター制を適用しました。

残念ながら、この間取り組んできた全学共通教育の改革はいまだ道半ばです。センター改組では、国際教育部の整備が課題として残されていますし、カリキュラム改革では、平成 30 年度全学改革を支援し香川大学の特色を示す具体案はどうすべきか、また持続可能な全学共通教育はどうあるべきかなどが検討課題として残されています。

新センター長のもとで、こうした課題が取り組まれ、本学の全学共通教育がより発展・充実することを祈っています。

3. 平成 29 年度新任教員研修会報告

日時：平成 29 年 4 月 18 日（火）9:30～17:10

場所：研究者交流スペース（研究交流棟 5 階）

【プログラム】

午前の部 9:30～12:00

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 開会挨拶・香川大学の今後のあり方 | 藤井宏史（教育担当理事） |
| 2. 香川大学のコンプライアンスについて | 真鍋光輝（労務担当理事） |
| 3. 大学職員が加入する社会保険制度 | 澤井行広（給与福利グループリーダー） |
| 4. 各グループからの事務説明 | |

午後の部 13:30～17:10

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1. 午後の部の趣旨説明 | 石井知彦（大教センター調査研究部長・能力開発部長） |
| 2. アイスブレイキング | 佐藤慶太（大教センター） |
| 3. 全学共通教育の運営体制について | 高橋尚志（大教センター共通教育部長） |
| 4. 全学共通科目の枠組みについて | 石井知彦（大教センター調査研究部長・能力開発部長） |
| 5. 香川大学における FD の概要について | 葛城浩一（大教センター） |
| 6. スキルアップ講座体験 | 西本佳代（大教センター） |
| 7. 新任教員お悩み相談 | |

4月18日（火）、新たに香川大学に来られた先生方を対象とした新任教員研修会が開催され、14名の参加がありました。ここでは、大学教育基盤センターが企画・運営した午後の部についてご紹介いたします。

この研修の特徴は、全体を通じてアクティブラーニング形式を取り入れて進められることです。それぞれのテーマで担当教員が情報提供をした後、グループでの話し合いをする時間が設けられています。ここには、参加者同士の交流を促したい、長丁場の研究をなるべく楽しく乗り切ってもらいたい、という狙いがあるのはもちろんですが、新任教員の先生方に、実際にグループワークを体験していただき、その技法を身につけてほしい、というセンター教員一同の思いが第一にあります。現在、全国的な動向に沿って、香川大学でもアクティブラーニングの推進が、教育目標として掲げられています。自分が学んだ頃と比べて、大学教員に求められるものが大きく変わったことにとまどう新任の先生もおられるでしょう。そういった先生方の不安を少しでも解消できれば、と考えて組み立てたプログラムです。同じ目的で、後半のプログラムでは、香川大学で開催されているスキルアップ講座の体験版を用意しました。実際に開設しているスキルアップ講座には、様々なものがありますので、今回の研修で興味を持たれた方は、是非そちらの方にも参加していただきたいと思います。参加された先生からは「アクティブラーニングの方法を用いた研修で、参加して参考になりました」、「同じグループの中で、いろいろ分野が違うが、意見を話せたりしてとても良い時間を過ごせた」といった感想をいただきました。当初の目標が達成されたようで、ほっとしました。（文責：佐藤慶太）



4. 第 65 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

大学等での教養教育に関する研究を目的とした中国・四国地区大学教育研究会が平成 29 年 6 月 17 日～18 日に香川大学を当番校として香川大学幸町北キャンパスで開催された。

本教育研究会は、中国・四国地区の国公立大学及び短期大学 43 校が会員となり、昭和 28 年から毎年度開催されており、65 回目となる今回は「教養教育は生き残れるか」をメインテーマとし、31 大学から教職員約 150 名が参加した。

一日目の基調講演とそれに続くパネルディスカッション、二日目の分科会が設定され、それぞれの会場で議論を深めることができた。以下の参加者の報告により、研究会の様子を紹介する。

■基調講演・パネルディスカッション

基調講演に先立ち、藤井理事から、教養は人間成長の基盤であり、危機に立たされることでその本質が明らかになるとの挨拶があった。これは、今回のメインテーマを「教養教育は生き残れるか」に設定した背景であり、ここには、教養教育の危機的な状況からいかに脱却するのかを議論したいという思いが込められている。

最初の基調講演は、東京理科大学の北原和夫先生から、「世界の認識と世界への関与：大学教育の分野別質保証における教養教育の役割」というタイトルで講演をいただいた。北原先生は、日本学術会議「回答 大学教育の分野別質保証の在り方について」をとりまとめられた実績を有する。各分野の学びのコアを言語化する作業を通し、一つのコアが他の分野にも影響を与える参照基準(たとえ学びが多様化しても絶対に外せないコア)の策定について説明をいただいた。学びの目標である分野別質保証については、①学問分野別、②教養教育との関係、③大学教育と職業の接続、について、それぞれ「21 世紀を協働する知性の涵養」というキーワードを用いて詳しく説明された。

続いて東京大学の吉見俊哉先生から、「文系の知とは何か？—長く広い歴史のなかで未来を見通す—」というタイトルで講演をいただいた。文系は役に立つ、その理由は、理系は目的遂行型であり、文系は価値創造型であるため、工学は 3～5 年先に役に立つが、人文科学は 20-1000 年先に役に立つとの説明であった。1158 年のボローニャ大学から始まった大学も、実は 16-18 世紀に一度死んでいるとの説明がなされた。2 度目の誕生はドイツのフンボルト型大学(教育と研究の一致)である。幅広い学びを提供する副専攻についても、ICU のメジャー・サブメジャー構想を例に挙げ、二刀流(短くても良いので刀を二本持つ)というたとえを用いて、その重要性についての説明がなされた。生涯教育についても、大学に三回入学できる制度(①18-21 歳、②30 歳代前半、③60 歳前後)の構築を提案された。

基調講演に引き続き、パネルディスカッションが行われた。最初に藤井理事から、各大学における改革の取組状況が報告された。過去 5 年間に 8 割の大学において教養教育改革が行われており、カリキュラムや教育方法に関する改革がスムーズに行われている一方、授業担当者の



確保については苦戦が強いられている。これらの現状に対して、北原先生と吉見先生からコメントをいただいた。組織改革については、大学教育改革の中でも最も重要であるとの説明がなされた。具体的な提案として、各学部で影響力の強い（シニア層の）教員をそれぞれ4～5人ずつ集め、全学的な組織を作り、全学共通教育を担当させ、科目決定権と単位認定権を与えるというアドバイスをいただいた。10人でも20人でも、専任のポストを用意することが重要とのことである。また、副専攻制の実施については、例えば文学や哲学などは就職には向かないと思われがちだが、決してそうではなく、例えば医学や工学のように、十分スキルを身につけた学生にとっては、潜在的に人文科学を勉強したいという欲求があるはずとのことである。全体の底上げを狙うのではなく、勉学意欲の高い学生を引き上げるのには、副専攻制は大変良い制度である、ただし、全学的に共通な時間割を導入することと、易きに流れないように学生の履修をコントロールすることが大事であるとのアドバイスをいただいた。（文責：石井知彦）

■人文・社会科学分科会

今回の分科会では、新たな試みとしてグループワーク形式を採用した。参加者が4つのグループに分かれ、それぞれのグループに香川大学の教員がファシリテーターとして入り、前半の報告終了後と後半の報告終了後の2回に分けてディスカッションを行う、という方法である。この進め方により、従来には見られない活発な議論が展開されたことをまずは素直に喜びたい。以下、内容のまとめを行う。

前半では、まず佐藤慶太・香川大学大学教育基盤センター准教授が、香川大学の全学共通教育の仕組み、「学問基礎科目（ディシプリンを扱う科目）」へのクォーター制適用をめぐる香川大学で展開されている議論について説明をした。続いて、齊藤和也・経済学部教授より、香川大学で平成28年度より開講されている、人文・社会科学系導入科目「書物との出会い」についての報告が行われた。これは「書物がもたらす新たな視点、驚きや感激を伝える」ことを目的とした授業である。以上を踏まえて、①「書物との出会い」のような授業が存在するか、このような授業は必要だと思えるか、②現在育むことが必要な教養的資質はどのようなものか、③人文・社会科学系のディシプリンの基礎を教えるのに、1クォーター（7.5コマ）で十分か、という3つのテーマでディスカッションを行った。ディスカッション後の全体シェアにおいては、①に関して）大学の学び入門から読書への導きまでもっていくのは難しい、かつてこういったオムニバス授業があったが、時間割を組むのが難しかった、②に関しては、「幅広い物の見方」が重要、「教養」以前に勉強時間が少なすぎるという問題がある、③に関しては）そもそも15回で十分か、という議論もしていないのに、7.5回で十分か、という議論は不適切だ、といった意見が出された。

後半では、まず葛城浩一・香川大学大学教育基盤センター准教授が前日のシンポジウムの内容も絡めて、人文系教員の減少が進む中で教養教育を維持することがいかに難しいか、香川大学の現状と課題、検討している方策はどのようなものか、について説明した。

これを踏まえて、各グループでは、①自分の大学では、教養教育の担当者の確保という課題に、



どのように取り組んでいるか、②教養教育の担当者の確保という課題にどのように取り組んだらよいと考えるか、という2つのテーマでディスカッションを行った。前半と同様、ディスカッション後に全体シェアを行った。特定の科目で担当者が不足する、という課題を抱えている大学が多いが、細かく見てみると、担当可能な教員はいるが担当をしてくれない、という場合と、そもそも担当可能な教員がいない、という場合があることがわかった。前者の場合は、科目の重要性について共通理解を形成する、教養担当に関して指標を作り、出勤を促す、公募の際に教養担当について明記する、といった方策が考えられる。後者に関しては、科目を担当者に合わせていく、非常勤講師を活用する、という意見があったが、地域によっては、非常勤講師の確保が難しい、という課題を抱えているところもあった。また、人文系教員の不足は特に国立大学で顕著な問題であり、この点で設置形態によって課題の質が異なることがはっきりしたことも、ディスカッションの成果であった。

(文責：佐藤慶太)

■自然科学分科会

本分科会では、分科会テーマに関連する活動について、3名の発表者から報告・話題提供いただき、一般参加者との間で質疑応答を実施した。発表者・参加者の中で活発な意見交換がなされ、有意義な分科会となった。

まず、猪口雅彦・岡山理科大学（理学部）学習支援センター長から、「岡山理科大学におけるリメディアル教育の改革」と題して、岡山理科大学におけるこれまでのリメディアル教育の取り組みと問題点が説明された後、今年度から実施しているリメディアル改革の内容が報告された。従来の講義形式から単元毎の講座形式とした点や非単位化とした点、現在までの実施状況、今後の課題として受講率や放棄率の改善が挙げられる点などの報告があった。これに対して、リメディアル教育の目的や難易度、取り入れている教材、リメディアル改革において生物科目を無くした理由、入学時学力把握のための試験実施内容、学生の受講率向上のための方策などについて質問がなされた。

続いて、香川大学で新たに取り組まれている文系学生向けの実験科目に関して2名から報告があった。まず、鶴町徳昭・香川大学（工学部）教授から、「文系学生向け『自然科学基礎実験』の検討と実施」と題して、香川大学における全学共通カリキュラム改革の取り組み、および、実体ある科学を経験してもらいたいという「自然科学実験」導入の背景が説明された後、H27年度の試行実施およびH28年度の本格実施の状況などが報告された。次に、横平政直・香川大学（医学部）准教授から、「文系学生に自然科学基礎実験を実施して分かった問題点と意義」と題して、実験テーマの構想、授業内容として発表会を取り入れた点や受講生の取り組み状況、今後の課題として安全確保の徹底や細やかな実験準備および補助人員の確保が重要である点などが報告された。これらの報告に対して、学生に対する授業の周知方法、実験担当者の割り当て、時間割やクラス分けについて、実施規模を拡大した場合の課題、理系学科のうちの看護学科だけ受け入れた理由などについて質問がなされた。（文責：丸 浩一）



■情報教育分科会

情報教育分科会は、昨年度と同様、「コンピュータと教育という視点からの授業改善」を大きな柱として、香川大学の林敏浩（報告者）の司会で実施された（発表者も昨年度とほぼ同じで岡山大学、広島大学、香川大学から話題提供された）。情報教育やBYODを含むICT利活用教育に関する実践、経験則やIRの観点からのこれらの分析、さらには新しい形態の情報教育を見据えた授業改善のモデル化や試行などの観点から議論を進めた。

最初に本報告の筆者である香川大学の後藤田中先生から、「オンライン教科書とe-Learningを活用した情報リテラシーの試み」という題目で話題提供があった。1年生が受講する情報リテラシーの一部講義で、オンライン教科書とLMSを利活用した事例が報告された。

次に、広島大学の稲垣知宏先生から、「情報学分野の参照基準と初年次一般情報教育」という題目で話題提供があった。情報学の中核部分は文系理系に渡る広い分野からなっており、分野の広い範囲をカバーできる専門家は非常に少ない問題点が指摘された。それに基づき、広島大学の初年次一般情報教育でどういった項目を取り上げているのか、また取り上げる予定なのかを紹介され、内容的に扱いにくい項目をどのようにカバーするのかなどの問題共有もされた。

最後に、岡山大学の長瀧寛之先生から、「岡山大学における全新生対象情報科目の実践」という題目で昨年度の引き続き連続性をもった話題提供があった。岡山大学の情報処理教育への取り組みについて、2016～2017年度の授業実践内容、2016年度の運用実態を受けての2017年度での変更点を中心に実践的な運用事例が説明された。全体討議では、情報リテラシー系科目が担当できる教員の確保不足などの問題から単位認定制度の可能性などが議論された。また、近年着目されているIRは学内規程などを注意して運用しないと授業で得られたデータが利活用できなくなる可能性があるなど、種々の学内活動との連携の中での注意すべき点なども情報共有された。（文責：林 敏浩）



■外国語（英語）分科会

外国語（英語）、外国語（初修）、日本語・日本事情分科会は最初の45分程度を合同分科会として共同開催し、後に3つの分科会に分かれる形式を取った。

分科会後半では、香川大学のTOEIC受験料は学生が払うのかとの質問があり、現状ではそうっており、学生の負担軽減が必要だとの回答があった。学部からの英語教育への要求はあるのかと質問もあり、各部局の意見を聞きつつ、共通教育のカリキュラムを改良していきたいとのことであった。最後にe-learning導入の目的について質問があり、香川大では少人数クラス導入時に週1コマで2単位としたため、学習時間の確保のために導入したことの説明があった。（文責：長井克己）



■外国語（初修）分科会

最初に金澤忠信（香川大学経済学部）准教授より「香川大学におけるフランス語教育の現状について」と題する報告がなされた。香川大学におけるフランス語の授業のカリキュラム、成績評価、ここ数年の学部別の履修者数の推移、学習のモチベーションを上げる海外研修や検定試験などについて紹介された。これに対して、香川大学で開講されているすべての初修外国語の受講者数の実態、検定試験の試験会場などについての質問があった。

次に胡継民（香川大学大学教育基盤センター）特命講師より「グローバル人材育成プログラム（中国語コース）について」と題する報告が行われた。平成 25 年度からスタートした香川大学のネクストプログラムのひとつであるグローバル人材育成プログラムは、英語コースと中国語コースの二つがあり、中国語コースは英語コースより参加学生数は少ないが、中国政府公認の中国語検定試験である HSK の上位レベルの級の合格率 100%を、三年連続で維持している。そのための授業の工夫なども紹介された。これに対して、参加学生数があまり多くはない理由、また参加することによる学生のリスク（脱落した場合、二年次に改めて英語の授業を履修する必要がある）などについての質問があった。

最後に、出席者のそれぞれの大学で実施されている派遣プログラムについての情報交換を行った。
(文責：最上英明)



■日本語・日本事情分科会

第1発表は、高水徹・香川大学インターナショナルオフィス講師による「さぬきプログラムの導入および拡充」であった。

特別聴講学生を主な対象とする「さぬきプログラム」の導入および拡充の流れ、同プログラムによる変化、同プログラムの現状、今後の見通しが説明された。

同プログラムの背景として、国費留学生を対象とした予備教育のための初級日本語集中コースの存在があった。同コースは、クラスメートが少ない、学生がキャンパスで孤立してしまいがち、日本語を実際に使う機会が少ない、などの課題を抱えていた。

同プログラムの開設により、学生同士の交流（留学生間も、留学生と日本人学生間も）が活性化され、日本語を使用する機会が増加し、それが授業にも好影響を与えるなどのメリットがもたらされた。

同プログラムの拡充により、国費留学生も同プログラムの中に位置づけ、日本人学生への授業の開放をさらに推し進め、受入れる留学生の日本語レベルを広げ、地域や行政との連携、産学連携を推進し、学内リソースをさらに活用することが目指されている。

第2発表は、塩井実香・香川大学インターナショナルオフィス講師による「就職支援を含む理系学生対象プログラム：香川大学の場合」であった。



「日本の食の安全」特別コース（大学院農学研究科）に焦点を当てた内容で、同コースの目的や特徴、日本語教育、教養教育としての日本語教育との差異、現在までに実施されてきた改善、課題等が紹介された。専門性を有する企業人材の育成とその中での日本語教育が中心的に議論された。

入学前からケアが実施され、入学後はコースの中間の時点で適切なレベルに達しているかをチェックし、卒業要件としてはN2または同等レベルを求めるコースである。就職後の実務レベルにおける日本語力も念頭に置き、日本語でレポートを書く経験も1年次から積んでいく。

このように手厚い指導により成果を上げてきた一方で、個々の学生に対する指導に多大な時間や労力がかかってしまうこと、担当する教員の確保（含 非常勤）、キャンパス間移動、どこまで指導を行うか/行えるかなどが課題として挙げられた。

上記の発表内容を受けた質疑応答では、今回の全体テーマである「生き残り」に関連した話題を含め、広範な議論が行われた。主な話題は、国費留学生の予備教育の受入れ体制について、これらの学生を対象にしたコースのあり方について、センター等の全学組織と他部局の連携についてなどであった。話題の性質上、結論を得るところまでは到達できなかったが、活発なやり取りが行えたことは非常にありがたいことであり、開催校の担当者として改めて御礼申し上げたい。

（文責：高水 徹）

■保健体育分科会

「コミュニケーション科目としての健康・スポーツ科目」というテーマのもと、授業におけるスポーツ活動が受講学生のコミュニケーション能力向上にどのように関係しているのかについて、コミュニケーションに注目した2つの授業実践（集中開講授業・定時開講授業）をもとに議論した。

2つの授業実践では共通して、健康・スポーツの授業を実施するなかでコミュニケーション能力の向上に向けた様々な取り組みが取り入れられていた。そこには授業の導入段階におけるアイスブレイキング（リズム肩たたき、人間知恵の輪、よろしくじゃんけん）や、主運動におけるチーム編成（出身地、誕生日などによる班分け）など、実践を通じて実際に他者とのコミュニケーションを求められる活動が含まれていた。授業者には活動のバリエーションと共に、活動の種類や実施するタイミングなどに関する十分な知識が求められると考えられた。つまり同じ活動であってもファシリテーターとして活動に関わる教員の力量によって、その活動の成果が異なるということである。従ってコミュニケーション能力の向上を目指す上では、教員自身のファシリテーターとしての能力が問われると考えられた。

他方、出席者間の議論では「体育・スポーツ科目」で扱うコミュニケーションを明確にする必要があるとの指摘がなされた。学生のコミュニケーション能力について、「スキルとして学習させるもの」として捉えるのであれば、それに応じた学習手段が選択され、その確認方法も学習期間や介入内容に応じたものになるであろう。一方で、コミュニケーション能力がスキルのように短期間で身に付くものではないと捉えた場合、その評価方法もまた異なってくる。今回発表された授業実践に明らかなように、コミュニケーション能力の向上に体育・スポーツ科目が一定の役



割を果たすことに関して、出席者の認識は一致していた。しかし、その効果を明確に示すと共に、有効な指導方法を探求していく上で、「体育・スポーツ科目」で培う、また培われるコミュニケーションとはどのようなものなのかについて明らかにする必要があると結論された。(文責：石川雄一)

■地域教育分科会

分科会では、4つの大学から地域教育の取組をご報告いただいた後、グループ協議を行った。4大学の取組については、報告書中に資料が掲載されているため、ここではグループ協議において取り上げられた事項を整理しておきたい。

グループ協議のテーマは、「教養教育における地域教育の成果・課題」である。30分という限られた時間ではあったが、各グループで実りある議論が行われたようだ。その議論を報告者なりにまとめると、何を(内容)、誰が(担当者)、どのように(方法)、教えるのかという3点にポイントがあったようにみえた。

まず、何を教えるのか、という内容についてだが、教養教育とは何であり、どのような能力の育成を目指すのか。また、その中で地域教育はどのように位置づけられるのか。ということが話しあわれた。学生が変化し、同時に教養教育が変容している中で地域教育の位置づけの難しさが確認された。



次に、誰が教えるのか、という担当については、地域と大学をつなぐコーディネーターの役割の重要性が再認識されたと共に、多くの大学において人件費が十分に確保できていないことが問題提起された。加えて、一部の教員だけでなく、全学の教員に地域教育の理解を求めることの難しさも指摘された。

最後に、どのように教えるのかという方法については、特に資格制度に注目が集まった。地域関連科目の受講者に大学独自の資格を授与する場合があるが、あくまで大学独自の資格であり認知度が低いこと、学生の意欲を喚起する難しさが指摘された。

以上のように整理すると、「教養教育における地域教育の成果・課題」というテーマだったものの、「成果」に対して「課題」に議論が集中したようにみえる。地域教育を担当する教職員の熱心さゆえと考えられるが、そうした教職員に対して、本分科会が何らかの寄与ができていればと願うばかりである。(文責：西本佳代)

5. よりよい授業のためのFDワークショップ報告

日時：平成 29 年 9 月 14 日(木)～15 日(金)

場所：休暇村讃岐五色台

この研修会は、平成 22 年度より始まった、新任教員を対象とした合宿型研修であり、今年で 8 度目の開催です。本学大学教育基盤センターの教員が講師を務め、香川大学から 9 名、香川県立保健医療大学から 1 名、高松大学から 3 名、愛媛県立医療技術大学より 1 名、徳島文理大学から 3 名、高知県立大学から 1 名、高知学園短期大学から 1 名、と四国 4 県より計 19 名の教員が受講生として参加しました。

研修全体を通して 1 チーム 4～5 名のグループ単位で、講義・グループワーク等が行われました。初日はまずアイスブレーキングを通してグループメンバーと打ち解けあうと同時に、授業で初めてグループワークを行う前に行うとよい活動も学びました。そして講義として 1) シラバスの書き方、2) 様々な授業方法、3) よりよい成績評価、の 3 つを、協同活動を交えて受講することで実践的な手法を多く学びました。グループワークでは、最初に学生がある授業に関して書いたコメントを KJ 法で整理する中で目指す授業の方針を決めました。次に、各グループに架空の全学教育講座・クラス人数が割り当てられ、1) 授業題目、2) シラバス(授業の概要・授業の目的・到達目標・成績評価・半期 15 週の授業計画等)、3) 90 分の模擬授業計画案、の作成を行いました。そして 1 日目にシラバスの中間発表、2 日目に模擬授業紹介とミニ授業(15 分)を、各グループが行いました。

最初はグループメンバーがほとんど初対面で緊張感がありましたが、アイスブレーキングや協同活動を通じて徐々に打ち解けあいました。授業計画の作成でもトピックのユニークさも手伝い、いろいろ意見を交換しアイデアを出し合う中でグループの結束も高まりました。模擬授業の発表では、各グループの精力的な取り組みが如何なく発揮され、和やかな雰囲気でも笑いも起きる中、研修で学んだことが生かされた、素晴らしい授業が展開されました。

初日の最終グループワークが 21:00 近くまで続き、実質 1 日半というハード・スケジュールでしたが、休憩も交えて各講義やグループワークがテンポよく進み、非常に有意義な研修でした。大学の授業を始めて経験される方、大学授業の進め方について学びたいとお考えの先生方にとって、非常に有益で有意義な研修だと思いますので、来年度も多くの先生方のご参加をお待ちしております。(文責・中住幸治)

(参加者からの声)

- ・ワークショップに参加し、学生参加型の授業に対する理解が深まった。議論が進む・進まないは学生の能力に依存すると考えていたが、議論をするための環境を整えることの重要性を学んだ。同時に、学生参加型の授業を行う場合、シラバスにおいて適切で具体的な目標設定、目標と対応した成績評価を示すことの意義をより深く考えられるようになった。
- ・研修では、素晴らしい先生方の講義・運営と、修学支援グループの皆様の迅速かつ適切なサポートのもと大変有意義な2日間を過ごさせていただきました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。今後も関心のあるFDは積極的に参加したいと思っております。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。
- ・1日目が、夜間までの長丁場でさすがに疲れましたが、2日目が午前中までなので、助かりました。グループワーク中、ずっと時間に追われていたので、長くても、不思議とだれることはありませんでした。
- ・2日間お世話になりました。ネット環境がないことで、逆にグループワークで考え、プロダクトを作り上げることに集中できた部分もありました。ただ、後半授業を計画、資料作成をする際は、ネット環境が欲しいと感じる部分もありました。
- ・到達目標の設定上仕方ないかもしれませんが、なかなかタイトな時間スケジュールでした。もう少し、昼食や夕食の時間を長めに設定してもらえるとよいと思います。シラバスの書き方に関する研修は良いと思うのですが、アクティブラーニングに関する研修は、県の交流人事で来ている先生方にとっては、非常になじみ深い内容ですので、改めて行うというよりも、研究の方法論についての講義等がよいのかもしれませんが。具体的には、アクティブラーニングの部分は、研究機関から採用された先生方と、学校現場から採用された先生方の研修履修コースを2つに分ける方法です。主催してくださっている先生方が少ない中で、難しい注文かもしれません。すみません。

■プログラム概要※GW=グループワーク

1 日目(研修は 9:15~21:00)

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイキング
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・講義 III「よりよい成績評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・懇親会

2 日目(研修は 8:00~13:00)

- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表(模擬授業)」
- ・閉会式



6. FD スキルアップ講座報告

- 講座名：「大人数講義をもっとうまくやるためのコツ」
- 日 時：平成 29 年 9 月 25 日（月）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

大学教育基盤センター主担当の葛城浩一准教授により、FD スキルアップ講座「大人数講義をもっとうまくやるためのコツ」が開催された。この講座では、30 個からなる有益な Tips うち、自分の授業で応用可能なコツを一つ以上持ち帰ることを達成目標としている。まず、講義の規模による特殊性の説明の後、授業の構成をしっかりと考えることの重要性が示された。具体的には「90 分以上連続して授業を続けず、少なくとも 20 分ごとにペースを変え、8 分ごとに参加者を授業に参画させる」などの例が示された。講義室内を匿名空間にしない工夫が必要であり、学生の座席を固定したり、学生の個人名で呼びかけたりするなど、学生にクラス内で無名の存在だと思わせないことが大切である。それに対して私は、学生の顔と名前を十分に覚えなまま授業を行っており、大いに反省させられた。アクティブラーニングの技法の一つである Think, Pair & Share により、学生に討論に積極的に参加させるための方法なども示された。今回のスキルアップ講座それ自体がアクティブラーニング的な手法によって行われ、参加者同士で、学生をいかに授業に参加させるかについて、具体的な方法の意見を出し合った。クリッカーの利用については、最近では学生のスマホを活用させる例が示された。（文責：石井知彦）



- 講座名：「始めよう!アクティブ・ラーニング型授業ー協同学習・話し合いの技法編ー」
- 日 時：平成 29 年 9 月 25 日（月）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

大学教育基盤センター主担当の葛城浩一准教授により、FD スキルアップ講座「始めよう!アクティブ・ラーニングー協同学習・話し合いの技法編ー」が開催された。この講座では、具体的なアクティブラーニングとして、「シンク・ペア・シェア」や「ラウンド・ロビン」、「トーキング・チップ」、「スリー・ステップ・インタビュー」などの技法が取り入れられ

ており、参加者自らがアクティブラーニングを体験しながら学ぶことが出来た。アクティブラーニングの定義の説明がなされた後、それが求められる背景についての説明があった。それによると、昨今の変化が激しい時代においては、単に知識を定着させるだけではダメで、知識を定着させるプロセスそのものを意識しながら学ぶことで、必要とされる「生涯にわたって学び続ける力」や「主体的に考える力」が養われるということであった。これまで私は、単に知識を定着させれば良いであろうと考えていたため、このことについては目から鱗であった。グループワークにおいては、二つの重要な点が示された。一つは「肯定的相互依存」であり、各自の持つ力を最大限に出し合って、良い意味で依存しあうことの重要性が示された。もう一つは「個人の2つの責任」であり、自分の学びに対して責任を持つのは当然であるが、仲間の学びに対しても責任を持たなければならないという説明であった。最後に、これらの技法を具体的に実践するための留意点の説明がなされた。

(文責：石井知彦)

- 講座名：「始めよう！アクティブ・ラーニング型授業－協同学習・教え合いの技法編－」
- 日 時：平成 29 年 9 月 26 日（火）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：佐藤慶太（大学教育基盤センター准教授）

大学教育基盤センター主担当の佐藤慶太准教授により、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブ・ラーニング－協同学習・教え合いの技法編－」が開催された。この講座ではまず、アクティブ・ラーニングの定義・求められる背景の説明があった後、協同学習の特徴・重要な要素・もたらされる恩恵に関する重要ポイント（例えば、協同学習によって知識の定着が促進されるだけでなく、それを実際に用いることによる汎用的能力の育成にも効果的であること、など）についての説明があった。続いて具体的な教え合い技法について、「ジグソー学習」という技法を体験しつつ、「ノート・テイキング・ペア」「テスト・テイキング・チーム」「ロールプレイ」の3技法を教え合う、という形で4つの技法を同時に学ぶことができた。さらに講師の実践事例紹介として「ジグソー学習」「ラーニングセル」「フィッシュボウル」を活用した事例が紹介され、加えて受講した学生の肯定的・否定的反応も実際に紹介された。最後に本日学んだ内容の振り返りとして、「教え合いの技法」を実際に取り入れるとすると、どのようなことが可能であるか、についてグループ内で意見交換がなされた。



(文責：中住幸治)

- 講座名：「始めよう！アクティブ・ラーニング型授業－協同学習・問題解決の技法編－」
- 日 時：平成 29 年 9 月 26 日（火）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：三宅岳史（教育学部准教授）

香川大学教育学部の三宅岳史准教授により、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブ・ラーニング－協同学習・問題解決の技法編－」が開催された。この講座はペアやグループで実際に問題解決に取り組み、その中で技法や留意点等を体験的に学ぶ形で行われた。具体的には「タプス(Thinking-Aloud Pair Problem Solving)」「センド・ア・プロブレム」「ケース・スタディー」「ストラクチャード・プロブレム・ソルビング」について体験的に学び、さらに技法の解説として「アナリティック・チーム」「グループ・インベスティゲーション」が紹介された。本講座では演習問題のトピックとして、大学教員に関係の深い出張報告書やマイケル・サンデスの「白熱授業」を取り入れたもの、さらに面接・大統領選挙・橋の崩壊などの多岐に渡るトピックの問題が紹介された。また演習を通じて、技法を学ぶだけでなく、確認を要する要素の見極め・交渉術・面接必勝法等に加えて功利主義（帰結主義）・動機主義（義務論）の活用という言わば汎用的能力についても学ぶことが出来た。そして議論の流れの構造（フレーム）に関する様々な型も紹介された。

（文責：中住幸治）

- 講座名：「始めよう！アクティブ・ラーニング型授業－協同学習・図解の技法編－」
- 日 時：平成 29 年 9 月 27 日（水）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：中住幸治（大学教育基盤センター講師）

大学教育基盤センター中住幸治講師による、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブ・ラーニング－協同学習・図解の技法編－」が開催されました。この講座では、「ワード・ウェブ」「シークエンス・チェイン」「チーム・マトリックス」「グループ・グリッド」「アフィニティー・グルーピング」という5つの図解の技法を体験しながら学びます。まず、「ワード・ウェブ」を用いて自己紹介をした後、「シークエンス・チェイン」でアクティブ・ラーニングに関する概念図を作成しました。その後、「チーム・マトリックス」と「グループ・グリッド」でアクティブ・ラーニングの内容について整理し、最後に「アフィニティー・グルーピング」で講座の振り返りを行いました。昨年は本報告を執筆している西本がこの講



座を担当しました。「体験しながら学ぶ」をテーマとして講座をつくるのに大変苦労した記憶があるのですが、中住先生は非常に中身のつまった内容を準備されていました。ぜひ、皆さんも受講されますよう、おススメします。(文責：西本佳代)

- 講座名：「始めよう！アクティブ・ラーニング型授業－協同学習・文章作成の技法編－」
- 日 時：平成 29 年 9 月 27 日 (水) 14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：西本佳代 (大学教育基盤センター講師)

「始めよう！アクティブ・ラーニング型授業」シリーズの最後を締め括る講座である。講座は他の講座と同様に、技法を体験しながら学ぶという方法で進められた。こうしたワークショップ型の講座ではまずアイスブレイクから始まるのが通例であるが、ここにも「ラウンド・テーブル」という技法が取り入れられていた。その後、「ダイアログ・ジャーナル」という技法の体験を経て、アクティブ・ラーニングの課題や



アクティブ・ラーニング型授業が目指すべき“ディープ・アクティブラーニング”についての解説がなされた。そして最後に、参加者にこれまでに学んだ協同学習の技法のいずれかを用いて、“ディープ・アクティブラーニング”を目指した授業計画を作成していただいた。その授業計画は「ペーパー・セミナー」という技法を用いてブラッシュアップすることを予定していたようであるが、時間の関係で参加者間で共有するにとどまった。講座の巧みな構成に加え講師の人柄もあいまって、終始和やかな雰囲気で行われていたのがとても印象的な講座であった。(文責：葛城浩一)

- 講座名：「初心者のためのクリッカー講座」
- 日 時：平成 29 年 9 月 27 日 (水) 16:20～17:50
- 場 所：幸町北キャンパス 422 講義室
- 講 師：西本佳代 (大学教育基盤センター講師)

私はクリッカー歴がかれこれ 10 年近くになるので「初心者」というわけではないのだが、そんな私でも非常にためになる講座であった。というのも、ここ 1 年の間に香川大学のクリッカーの仕様が大きく変わったからである。これまでの仕様は Windows10 に対応していない部分があり、個人的には使い勝手が少し悪く感じていたのだが、新しい仕様ではそれ

に対応しているのは勿論のこと、専用のレスポンスカードを用いずとも、スマホから回答を送ることができるなどの新しい機能が搭載されている。講座では、まずこれまでの仕様での使用方法について説明がなされた後、新しい仕様での使用方法について説明がなされた。後半は、参加者からの要望に応じて、スマホから回答を送る方法を参加者と一緒に試行していたのだが、一手間かかるかなという印象は受けた。講師によれば、新しい仕様では文字を送ることができる機能もあるとのことである。クリッカーの可能性もかなり広がっているので、できるだけ多くの教員にこの講座にご参加いただければと切に願う次第である。(文責：葛城浩一)

■今後のスキルアップ講座の予定

学生の学びを促すシラバスの書き方	12月25日(月) 13:00~14:30
基礎から学ぶ学習評価法	12月25日(月) 14:40~16:10
学生参加型授業の技法	12月25日(金) 16:20~17:50
シラバス・授業を改善しよう!	1月12日(金) 9:30~12:00
「アカデミック・スキル」をどう教えるか	3月1日(木) 13:00~14:30
「日本語技法」をどう教えるか	3月6日(火) 13:00~15:10

7. 平成 29年度注目の全学共通科目のご紹介

■主題 C-基礎科目「地域と香川大学」

主題 C-基礎科目「地域と香川大学」が平成 29 年度第 2 クォーターから開始となりました。香川大学の標榜する「地域に根ざした学生中心の大学」（香川大学憲章前文）に通じる科目と言っていいでしょう。1 単位の e-Learning 科目であり、地域理解を目的とした全学必修科目となっています。平成 28 年度より「制作ワーキンググループ」を立ち上げ、少数精鋭で授業づくりに取り組みました。産みの苦しみを堪え忍べば明るい未来が開けると信じて制作に関わりましたが、始まってみると維持・管理にかかるエネルギーが予想以上であることに気がつきました。もちろん「後の祭り」です。

「地域と香川大学」のご紹介をします。オリエンテーション回（0 回）を含むと 9 回分のコンテンツとなります。1 回あたりの時間は 90 分を超えるよう、制作コーディネーターに依頼しました。受講生は、各回の視聴後 5 問の小テストを受け、3 問以上正解でなければ合格なりません。（各回の問題は 15～20 問程度準備されており、そこからランダムに出題される仕組みとしています。）1 回でも不合格があれば単位は認定されないという厳しい設定です。最終回を終えると課題レポートが出題され、3 つのキーワードを含む、600 字以上のレポートを提出します。

1 回あたりの科目内容は、複数のモジュールから構成されています。第 1 回を見てみると、ガイダンス（約 4 分）、学長挨拶と激励の言葉（約 14 分）、教育担当理事による本学の教育理念と期待する学生像（約 12 分）、香川大学の歴史（約 46 分）、学生と学ぶ香川大学小史（約 28 分）、まとめ（約 2 分）という構成です。合計すると 100 分を超える内容となっています。構成の基本的な考え方は、受講生の集中力を途切れさせないよう、20 分以内に収めること、もしそれを超える場合には区切りのよいところで分割すること、としました。この考え方は、適宜モジュールの更新が容易になるようにという配慮も含んでいます。

授業内容については、校内教員から辛辣なご意見もいただいています。批判的視点のない現状受け売りの授業内容が、大学で提供する授業としていかなるものか、という趣旨の意見です。産業振興や観光振興あるいは観光振興等、まちづくり政策は、地方の幸福につながるものなのか、それを批判的に議論せずして大学の存在意義はないということでしょう。大学人としては当然の批判をいただき、すがすがしい思いさえしました。この授業は学生のみならず、本学教職員にもあまねく開かれているのです。そこに自由な意見を届けられますし、制作ワーキンググループに委員として参画することで、よりよい授業づくりに関われるのです。それぞれの専門から離れた位置にある、全学共通科目の地域理解教育が限られた責任体制で提供されるのではなく、開かれた責任体制に移行できるチャンスでもあるのです。

私は大役を仰せつかったという認識を新たにすると同時に、大学の新たな地平が開かれたような気さえています。この科目を育てるのは、本学教員一人ひとりであるということ強く表明して、科目の紹介に代えます。（文責：地域教育部長 清國祐二）

8. 新スタッフから一言

教育・学生支援部次長（併任）修学支援グループリーダー
野口 豊裕

平成 29 年 4 月 1 日付け学内異動により、学務グループリーダーから教育・学生支援部次長（併任）修学支援グループリーダーに就任しました。

昭和 53 年 4 月に大学併設の商業短期大学部に採用され、約 40 年間香川大学に勤め、その職務分野も総務関係（5 年）、会計関係（29 年）、学生関係（約 6 年）と経験させていただき、その間多くの方々にお世話になりました。

法人化の際にお世話になった民間出身の初代監事（常勤）から、「大学に勤められる幸せ」について、「民間は営利を目的として会社の発展のため一生懸命働く必要があるが、大学（職員）は営利を追求する必要がなく、第三次産業の人材養成機関であり綺麗な良い職場ですよ。」という言葉が、今も印象深く思い出されます。

会計経験が長い私にとって、退職前に修学支援グループで入学直後の学生に関わり、大学の業務全般をバランスよく経験できることは、大変幸せなことだと感謝しています。

平成 29 年度から導入したクォーター制を始め、本学の大学改革・教育改革の取り組みも社会に公表し、着実に新たなスタートを切りつつあります。

香川大学の構成員として、退職までの残り期間、全学共通に関わる教職員の方々と協力し、学生の修学環境の整備等に全力を尽くしたいと思っていますので、よろしくお願い致します。

修学支援グループ チーフ 梶川 貴三子

平成 28 年 10 月 1 日付けで教育・学生支援室修学支援グループに配属されました梶川と申します。

学生さんと接する仕事は、5 年半ぶりであり、日々緊張しています。特に修学支援グループでは、全学部の学生さんと接する部署であり、全学共通科目から学部開設科目にうまく橋渡しができるよう、丁寧な修学支援を心がけたいと思っています。

まだまだ皆様にはご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、少しでも早く仕事に慣れ、微力ではありますが、「地域に根ざした学生中心の大学」に貢献できるよう業務に励みたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い致します。

修学支援グループ グループ員 白川 奈実

平成 29 年 1 月 1 日付けで新規採用され、教育・学生支援室修学支援グループに配属されました白川奈実と申します。

社会人として初めて働くので分からないことも多々あり、周りの皆様にご指導いただきながら日々の業務に励んでおります。昨年大学を卒業したばかりですので、学生にとって身近な存在であり、学生の立場になって考えることのできる職員でありたいと考えております。至らない点が多く、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

学務グループ・修学支援グループ 事務室移転のお知らせ

学務グループ・修学支援グループは
平成29年12月4日（月）から
大学会館2階に移転します。





原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。